ネアン（二）　記憶のかけら

中川莉羅

春の朝はすてきだ。風に運ばれて雨の匂いと林檎の花の香りがする。裸足のまま庭に出ると、しっとりと濡れた土が足指に吸いつく。空は余すところなく青く、ひかりの粒が雲を縁どっている。そこから見下ろすと、積み木のような家々が崖にへばりつくようにして眼下に広がっている。

ふと、何者かに背中を押されるのを感じた。振り向くとそこには一匹の驢馬がいた。庭の中には柵に囲まれた小さな一角があり、そこが彼のささやかな住処であるらしかった。驢馬は大きな茶色い瞳でわたしを見つめ、陽にあたためられた鼻先をやさしく押し付けた。

「おはよう、えーと、アンディーね」

わたしは驢馬の首に下げられた真鍮の鈴に彫ってある名前を見て言った。アンディーは頷く代わりにぶるんと頭を振り、足元の草を静かに咀嚼し始めた。

それから郵便受けを開けると、クッキーと花束が入っていた。誰か親切なひとが届けてくれたのかもしれない。わたしはスキップで家に戻った。朝食を終えて歯を磨こうとして、歯磨き粉がないことに気が付いた。それに石鹸もない。

「これはお店に行くしかないな。ちょっとおめかししなくちゃね」

わたしはクローゼットを漁って、革のジャケットとミニスカートに着替えた。それは明らかに大人の女性用に仕立てられたものらしく、ジャケットの袖は長すぎたし、スカートの腰回りはぶかぶかだった。けれど仕方がない。それがそこにあった唯一の洒落た服だったのだ。

洗面所に立ち、鏡の前の自分を見つめる。マッチ棒みたいにちっぽけな女の子がそこに立っていた。年のころは十歳から十二歳くらい。茶色の髪の毛は顎先で切り揃えられ、白い小さな顔の中で意志の強そうな瞳が輝いている。首にはロザリオがぶらさがっていて、それはまるで聞き分けのない犬の首にかけられた無骨な首輪のようだった。ロザリオを外そうかと思ったが、結局それをジャケットの下にしまい込んだ。

一時間ほど歩き、散々迷った末に「マキシム」に到着した。どの道もみんな同じように見えるし、歩いている間に蝶を追いかけたりするものだから時間がかかるのだ。「マキシム」はその集落で唯一の食材店で、生鮮食品から日用品まで揃う、いわゆる何でも屋だ。娯楽などない小さな村の中で、その店は近所の人々の社交場の役割も果たしているようだった。レジの横にはメソポタミア時代から存在していそうな旧式のテレビが置いてあり、人々は暇つぶしにテレビを観たり、店主と軽口を叩いたりするのが常らしかった。

その日もレジの周りに人々が集まってテレビを観ていた。わたしは大人たちの間に割り込むようにしてレジに並んだ。ところが店主はテレビに夢中になっていて、こちらの方など見向きもしな

い。大きな厚ぼったい背中を向けて一心にテレビを見ている様子は、まちがえて人里に降りてきたヒグマのようだった。わたしは彼の背中にもう一度声をかけてみたが、やはり返事はなかった。

「子どもだと思って馬鹿にしてるんだわ」

頬が熱くなるのを感じた。代金を置いて帰ろうとすると、店主が呟くのが聞こえた。

「おお、かわいそうに。世も末だねえ」

その声につられてついテレビの画面に目をやった。

そこにはひとりの女性が映っていた。画面下には「Mさん（四十八歳）」というテロップが表示されている。彼女はとても小さく、背骨が曲がっていて、髪の毛は灰色で櫛も通っていなかった。まるで重力が彼女に対して悪意を持っているみたいに、唇はひしゃげて垂れさがり、地の底にまで引っ張っていこうとしているようだった。土気色の顔の中ではふたつの穴のような目が落ち着きなく動いている。何より奇妙なのは、彼女の服装だった。着古した毛糸のチョッキにはあちこち小さな紙が貼られていて、彼女が動くたびにかさこそと音を立てた。カメラがズームすると、紙面の文字が見えた。そこには「夫の名前はヨシュア」とか「卵の賞味期限は三月十一日」といった情報が事細かに書き込まれていた。

「忘れてしまうんです、そうじゃないと」

彼女はくぐもった声で言い、台所に向かった。レポーターがすかさず彼女の後を追った。彼女は一瞬いらだたしげに立ち止まったが、その瞳はぼんやりと宙に戻り、何事もなかったみたいに埃っぽい戸棚を開けた。彼女は怒りとか羞恥心といった感情の名前も忘れてしまったみたいだった。そのせいか彼女はどことなく影のように見えた。

ナレーションが「若年性記憶障害」という病名を重々しく告げた。彼女は四十八歳にして、すでに二十四時間連続した記憶を持ち続けることができないのだと。

「それっておかしなことなのかしら？」

わたしは誰にともなく言った。けれど答えてくれるひとはいなかった。その声はどこにも届かず、灰色の空気を揺さぶって壁にぶつかりぽとんと落ちた。わたしは踵を返し、その場を離れた。

家に戻るとまっすぐ寝室に向かった。シーツの下をまさぐると、革の表紙のぶ厚い日記が現れた。あてどなくページをめくる。心臓が地球の果てに飛んで行ってしまいそうなほど強く脈打っている。最後のページに辿り着くと、青インクの文字がこう告げていた。

―　わたしの名前はネアン。

わたしは深いため息をついた。まるで宇宙飛行士が長い飛行を終えて地球に戻ってきたみたいに。ネアン。その三文字が楔のようにこの躰をここに繋ぎとめている。

「ねえ、メープル。わたし、やっぱりあのひととは少し違うような気がするの」
その晩、わたしは眠りにつく前にねこのぬいぐるみのメープルに言った。メープルは金色の瞳をみはり、じっと話を聴いている。
「今日ね、テレビで記憶障害の女性を見たの。あのひと、ひどく苦しそうだった。でも、どうしてそんなに苦しいのかわからないな。わたしなんて、朝起きるたびに自分が誰だかわからなくなっちゃうけど、それで困ったことなんて一度もないわ」
もしメープルに話ができたら、「そんなものかね」とでも相槌を打ったことだろう。わたしは話し続けた。
「それに記憶がどんどん溜まっていったら、きっと脳みそがとても重くなっちゃうんじゃないかしら。頭がずんずん重くなって、歩くたびに記憶がこぼれ落ちていくかもしれない。そんなの嫌だな」
わたしは目を閉じて、自分が大きな袋を担いで歩いているところを想像した。記憶のかけらをうんと詰め込まれたその袋は今にもはちきれそうで、歩くそばから砂粒のように情報がこぼれ落ちてゆく。砂粒はわたしの歩く道を灰色に塗り替え、風に紛れてこの世界から消えてしまう。そこまで考えて頭を振った。
「心配しないで。自分の名前はしょっちゅう忘れるけど、メープルのことは忘れないよ」
そう言って頭を撫でてやると、メープルは心なしか少し安心したように見えた。
「さあ、お祈りをしましょう」
目を閉じ、ロザリオの珠を繰りながら祈りの言葉を唱える。メープルも隣で聴き入っている。
それから眠りに落ちる。闇の中にすとんと急降下する。それは暴力的とも言っていいほどの勢いでわたしを未知の世界に連れてゆく。わたしの意識はもがきながら問う。またここに戻ってこられるだろうか。目が覚めたとき、わたしはまだ「ネアン」のままだろうかと。けれど答えはなかった。ただ耳鳴りのするような深い闇がそこにあるだけだった。

ネアン（一）「夢の重さ」

中川莉羅

記憶というのはどのくらいの重さを持つのだろう。ヒトの脳は一二〇〇ｇほどの重量だそうだけれど、きっと情報のありかはそこだけではない。記憶の残骸は春の雨のように細胞のすみずみを濡らし、すっかり重くなった躰をこの世界に留まらせる。その重みが時に骨や肉を砕きそうになっても。

朝、遠くから聞こえる教会の鐘の音で目を覚ます。それはなつかしい誰かの声みたいにわたしに呼びかける。まぶたの裏が明るい。ぽっかりと目を開け、天井の木目をしばらく見つめる。明るい木肌にお化けの涙みたいな染みが見える。冷たいシーツから手を出して、ほうぼうに散らばっている宝物に触れる。ねこのぬいぐるみのメープル、お気に入りの白いワンピースと木綿のソックス、硝子のペンと、日記。わたしは日記をたぐりよせ、革の表紙の手触りを確かめ、匂いを嗅ぐ。

ページを開くと、そこには青いインクでびっしりと書き込みがされている。紙は古びてくったりして、森の中の落ち葉みたいな甘い匂いがする。そこに描かれている数々の夢は、わたし自身が書いたものだというのに誰かちがうひとの物語みたいに見える。それから最後のページをめくると、こう書かれている。

―　わたしの名前はネアン。

わたしは声に出してそれを読む。ネアン、ネアン。口の中でその響きを確かめる。それはこの世界の扉を開ける秘密の鍵みたいに見える。その名前だけが、わたしが自分自身について知っている唯一の情報だった。わたしはペンを手にとって昨晩見た夢を書き始める。

辺りは紫色の薄闇に包まれている。そこはどうやら古い教会らしい。堂内にはひんやりとしたかび臭い空気が漂っている。夕暮れのひかりがステンドグラスから射し込み、朽ちそうな木の床に奇妙な模様を描き出している。背の高い男性と、小柄な女性の姿が見える。男性はキャメルのコートに緋色のマフラーをし、手には黒い革の手袋をはめている。革靴はぴかぴかに磨かれていて、顔が映りそうなくらいだ。女性の方は黒いベルベットのジャケットに揃いのスカート、ぴんと尖った黒いハイヒールを履いている。頭には大きな羽根飾りのついた帽子を被っている。帽子の翳からのぞ

く肌の色はミルクをたっぷり浴びたように白く、唇の横にほくろがあった。彼女の躰から百合の香りがかすかに漂っていた。

辺りはとても静かだった。空中を舞う埃が床の上に落ちる音さえ聞こえそうなほどに。

「いよいよだね」と男性が言った。

「そうね」女性が答えた。

「長い旅になるだろうな」

「きっとそうでしょうね。でも私、あなたと一緒なら怖くないわ」

女性は男性の肩に頭をもたせかけた。ふたりはしばらくじっとしていた。まるで影絵の中に閉じ込められてしまったみたいに。彼らの影が床に長く伸びていた。その影が床をぬめぬめと這い、ステンドグラスに達し、天井まで覆いつくすように思われた。しかし影は今のところ狡猾な狐のように彼らの足元で黙り込んでいる。わたしはわざと明るい声を出して言った。

「ねえ、メープルも一緒に行っていいでしょう？みんないっぺんにいなくなったら、きっと淋しがると思うの」

ふたりは顔を見合わせた。不穏な沈黙が漂った。男性は咳払いをし、静かな声で言った。

「残念だけど、君は一緒に行けないよ。メープルもお留守番だ」

「どうして？」

「そういう掟なんだ」

「オキテってなあに？」

男性はしばらく腕組みをして考えていたが、「ちょっと失敬」と言ってわたしの膝からバスケットを取り上げ、中から林檎を取り出した。

「ここに林檎がひとつある。僕が手を離したらどうなるだろうか」

男性は林檎から手を離した。とん、と音がしてその赤い実は木の椅子に落下した。音は意外なほど大きく響き、四方の壁にこだました。祭壇で眠る神様を起こしてしまうんじゃないかと思うほどだった。音が止むと、男性がまた口を開いた。

「この世界の掟は、僕たちの力では変えられない。手を離せば林檎は落ち、地面に落ちた林檎は放っておけば腐ってしまう。そこに人間が入り込むことはできない。わかるかな？」

わたしは頷いた。

「つまり、そのオキテのせいでふたりは遠い場所に行かなくちゃいけなくて、わたしはここに残る。そういうことね？」

返事はなかった。その代わりいきなり肩を抱きしめられ、わたしは身動きが取れなくなった。わたしの頬に女性の頬がぴったりと押しつけられていた。それは熱く、涙の匂いがした。しゃくりあげる声がとぎれとぎれに聞こえてきた。大人も泣くことがあるのだと、その時はじめて知った。わた

しはどうすればいいかわからなかった。彼女の涙がわたしの頬を伝い、首筋へ、鎖骨へと流れ、ワンピースの襟を濡らしていった。一世紀ぶんくらいの時間が流れたころ、女性はようやくわたしから身を離した。まるで何かの刻印のように、彼女の涙とおしろいの入り混じった匂いが肩のあたりに残った。

「神様が君を守ってくださいますように」

ふと気が付くと男性がすぐそばにいて、首に何かをかけてくれた。鎖骨のあたりにひやりとした重みを感じた。手をやると、小さなビーズ玉のようなものに触れた。わたしはそれを窓辺の明かりに透かして見ようとした。けれどいつのまにかひかりは去り、夜の使者がそこら中に忍び寄ってきていた。

「ロザリオって言うんだ。この珠を一粒ずつ繰りながらお祈りするんだよ」

男性が言った。それは亡霊の声みたいにくぐもって聞こえてきた。ふたりのシルエットは闇に溶けてとうに見えなくなっていた。

「忘れないで。僕たちはずっと君を見守っている。いつかきっとどこかで逢える。その日まで待ってて」

「さようなら、ネアン」

ふたりはそう言い、わたしの頬にかわるがわるキスをした。それから扉を開け、静かに外に向かった。壊れたバイオリンのような音を立てて扉が閉まった。扉のすきまからほんの一瞬だけ見えたひかりは、また闇に吸い込まれてしまった。

教会の鐘が鳴った。ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ。五つ目の鐘が鳴った時、わたしは目を覚ました。

書き終わったあと、わたしはしばらく自分の書いた文字を眺めていた。すると目の奥から水滴がこぼれ、ぱたりと落ちた。それは雨のように降ってきて、あっというまに紙面を濡らした。大変、インクがにじんでしまうと思うけれど、わたしは泣くのをやめることができなかった。それはちょうど誰かが探り当てた水源みたいに、躰の深いところから湧き出てきて止まる気配がなかった。何か大切なものを失ってしまったような予感が、針のように胸を刺した。涙のかたまりが次から次に喉元にこみあげ、堰を切ってあふれだしていった。躰がどうにかなってしまいそうなほど、わたしは泣いた。

泣き疲れてベッドに身を投げ出すと、首のあたりで何か冷たいものが揺れたような気がした。パジャマの下に手を滑らせると、小石の触れるようなかすかな音がした。たぐりよせると、手の中にロザリオがあった。紫陽花色のビーズがきらめき、ペンダントトップには十字架にかけられたイエ

スキリストの姿が施されている。窓辺からこぼれるひかりの粒を身にまとい、ロザリオはつつましく輝いていた。

―忘れないで。

彼らの声が耳元で聞こえたような気がした。もちろんそこには誰もいなかった。ただ風が通り抜けていっただけだった。風はかすかに甘くきらめいて、春の匂いを運んできた。